

# 現代日本語における和語3拍名詞について

——出現位置別に見た音素分布の分析と考察——

現代日本語における和語3拍名詞について

入江 さ や か

はじめに

名詞はあらゆる言語において、最も高い割合を示す品詞である。現代の一般の語彙を拍数から分類した調査から、4拍語が4割近くでピークをなし、3拍から6拍までで90.2%を占めることから、3拍から6拍の語が、日本語としていちばん優勢な安定しやすい語の長さであることがわかっている<sup>①</sup>。本論では、和語3拍名詞の出現位置別に見た音素分布について考察する。2拍の和語名詞については、すでに調査されているので、今回は、3拍の和語名詞を調査したいと思う。調査の結果は、現代日本語についての記述の一部をなすものであるが、同時に、日本語教育の場でも、音声教育、語彙教育の分野で参考になるだろう。

## <1> 拍（音節）と機能負担量について

本論での「音節」とは、音韻論的な立場をとり、促音や撥音などの特殊音素も、独立した音素とみなす。日本語の特質として、「1つは、1つの母音の前に、1つの子音のついたものがあたかも1つの単位のように意識されること。（中略）2つは、子音母音の連結した「単位」がおおよそ同じくらいの長さに発音されること<sup>③</sup>」があげられる。つまり、音節とは、ほぼ仮名1字に相当し、音韻論的な単位としての「拍（モーラ）」と同じ意味で用いる。本論では、「拍」を使用する。

いずれの言語もそうであるが、個々の音素は無秩序にならんでいるわけではない。一定の規律に従って配列され、拍を構成し、その拍もまた、傾向を持った配列をみせる。「機能負担量（Functional burdening）」とは「音韻機能、即ちある言語内において、音韻的対立が語義の区別において演ずる役割、の軽重をいう<sup>④</sup>」つまり、個々の音素が語の決定に消極的に関わる負担の度合いである。機能負担量は、概ね統計的に数字で表される。1つの言語において、音素が1つ違うだけで、どれだけ異なる単語ができるか、各音素についてどれほどあるかを調べることも必要である。しかし、このような調査を、

実際のコミュニケーションの場を対象にして調査することは非常に困難である。したがって、今回は、辞書の見出し語形をもとにして、出現位置別に各音素の分布を調べる。

玉村文郎(1984)『語彙の研究と教育(上)』は、中村仁美の「音韻論からみた現代日本語における2音節和語名詞について」を紹介している。これは、和語2拍名詞において出現位置別に見た音素の分布、及び結合の度合いを調べ論じたものである。

それによると、語頭、語中、語尾の各位置より、

〈語頭〉	〈語中〉	〈語尾〉
/k/ /a/	母音	/r/ /i/
13.49→23.46	/k/ /a/ /r/	12.96←24.69
3.88	8.19←14.27→6.52	3.62
	2.37 1.88	
	子音	
	/a/ /r/ /i/	
	14.54←7.86→13.79	
	2.05 2.21	(数字は%を示す)

の結合率が最も高い。これらを組み合わせると、/kari/ という語形ができる。つまり、「仮、雁、狩、刈、借り」などが最も典型的な和語2拍名詞なのである。では、和語3拍名詞ではどうか。これは、和語名詞の中でも辞書の見出し語数を基準とする限り、最も数が多いので、調査対象としての価値が高いであろう。

## 〈2〉 和語3拍名詞(代名詞を含む)の出現位置別に見た音素分布

### 2-1 作業の手順

和語3拍名詞は、『新潮現代国語辞典』の中から抜き出した。代名詞も、名詞と同様に、音素列の面で日本語の特徴を示すと思われるので含むことにした。しかし、その数は少ない。この辞書では、見出し語が、平仮名の場合は和語、片仮名の場合は漢語または外来語であることを示す。従って、見出し語が平仮名である和語の3拍の名詞及び代名詞を、そのまま取り出した。なお、分類、表記はすべて、辞書に従った。

母音は、/a/ /i/ /u/ /e/ /o/、半母音は、/j/ のみとし、それに続く母音音素は /a/ /u/ /o/ の3種とする。子音は、カ行 /k/、ガ行 /g/、サ行 /s/、ザ行 /z/、タ行 /t/、ダ行 /d/、ナ行 /n/、ハ行 /h/、バ行 /b/、パ行 /p/、マ行 /m/、ラ行 /r/、ワ行 /w/ とした。半母音は母音に属し、撥音 /N/、促音 /Q/ は、子音扱いとする。単独母音拍は、子音を  $\phi$  (無) とし、また語中、語尾に撥音、促音がある場合はその拍の母音は  $\phi$  (無) とする。拗音は、子音プラス半母

音プラス母音拍である。

2-2 音素配列別に見た和語の数

音素の並び方には、どんな言語にも一定の規律がある。「日本語の拍はすべて次のA、Bのどちらかに属する。Cは子音音素、Sは半母音音素、Vは母音音素であることを示す。

A. [1C+(1S+)]1V …………… 一般拍

B. N (撥音), Q (促音), V' (引き音節) …………… 特殊拍

尚、[ ] や ( ) の中は非必須成分であることを示す。<sup>⑥</sup> 従って和語3拍名詞の場合、以下のような音素配列がある。

【表A】 音素配列別に見た和語の数

名称	音素配列	語数	特殊拍を含む場合	語数	語数合計	全体比率
NO.1	VVV	8			8	0.25
NO.2	VVCV	79	VVC φ	1	80	2.47
NO.3	VCVV	75	VC φ V	1	76	2.35
NO.4	VCVCV	624	VC φ CV	24	648	20.04
NO.5	CVVV	36			36	1.11
NO.6	CVVCV	260			260	8.04
NO.7	CVCVV	217	CVC φ V	1	218	6.74
NO.8	CVCVCV	1845	CVC φ CV	56	1907	58.99
			CVCVC φ	6		
計		3144		89	3233	100.00

音素は最大6つあるので、前から順にP1音素、P2音素……、P6音素と名付ける。

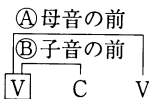
【表A】を見ると、例えば、NO.1の名詞は、母音（または半母音）音素のみで構成されているので、音素の数は、3であるが、その場合、最初のVをP2音素（語頭）、次のVをP4音素（語中）、最後のVをP6音素（語尾）とする。

2-3 音素結合の組み合わせ、及び | 総表 | について

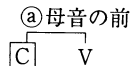
音素結合の組み合わせを、以下に示す。

<語頭>

I 語頭が母音のとき

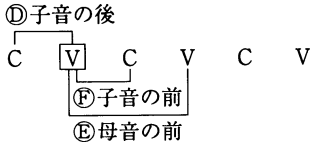


II 語頭が子音のとき

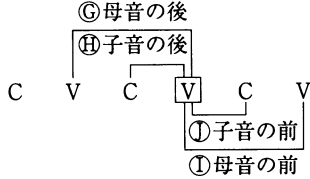


<語中>

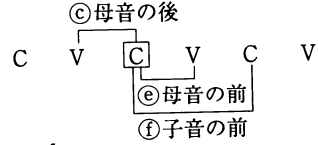
◇ P 2 音素について



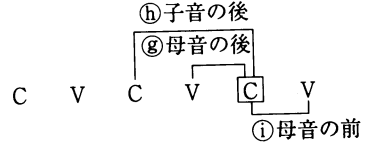
◇ P 4 音素について



◇ P 3 音素について

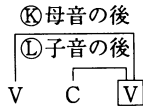


◇ P 5 音素について

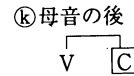


<語尾>

I 語尾が母音のとき



II 語尾が子音のとき



語頭が母音の時、その母音は、母音の前、あるいは、子音の前に出現する。語頭が子音の時、その子音は、母音の前にのみ出現する。語中の各音素は、母音の後、子音の後、母音の前、子音の前に出現するが、音素によっては、出現しない時もある。語尾が母音の時、その母音は、母音の後、あるいは、子音の後に出現する。語尾が子音の時（全て、撥音であるが）は、その子音は、母音の後にのみ出現する。㉑のように、VとVが結ばれているのは、その間のCが無い(φ)ことを示す。〔総表〕の左端上段は、母音音素、及び半母音プラス母音音素、下段は、子音音素（半母音である/w/も含む）を示し、上段は、左端の音素の出現位置を示す。「母前」は母音の前、「子後」は、子音の後を表す。例えば、語頭のaの「母前」は22であるが、これは、語頭の音素が/a/で、それが母音の前に出現する度数が22であることを表している。語中の㉑及び㉒列は、P2音素とP3音素、この二つの音素間の結合の度合いを示し、㉓及び㉔列は、P3音素とP4音素、㉕及び㉖列は、P4音素とP5音素の両音素間の結合の度合いを示している。なお、音素結合の組み合わせの記号と〔総表〕の記号は一致している。母音の後と子音の後の合計と母音の前と子音の前の合計が同じであるのは、母音が子音の前に来るときと、子音が母音の後ろに来るときは同じことであり、母音が子音の後ろに来

るとき、子音が母音の前に来るときと同じことであるからである。

### 〈3〉 音素分布の分析と考察

#### 3-1 語形から見た日本語らしさ

音素配列別に見た和語の数の表【表A】を見ると、和語3拍名詞において、CVCVCVで構成される名詞が全体の59.0%、VCVCVで構成される名詞が全体の20.0%で、両方合わせて約80%である。上代音韻の特色である母音連続忌避が、現代語まで影響したことが窺える。他に日本語らしいと感じられる項目として玉村文郎『語彙の研究と教育(上)』は次の項目を挙げている。

- (1) 直音と拗音
- (2) 語頭の清音と濁音・半濁音
- (3) 短音と長音(引き音節の有無)
- (4) 語頭ラ行音の有無
- (5) 語中・語尾のハ行音の有無
- (6) エ列音
- (7) 促音の有無
- (8) 撥音の有無

以上の8項目のうち、(3)までは、各項目の左側の方が標準的一般的で、日本語らしい。(4)(5)(7)(8)では無い方、(6)では、エ列音よりも他のア列音などの方が日本語らしいことになる。本論では、(1)(2)(3)項目について検証する。

(1) 和語3拍名詞3233語のうち、拗音拍を含む語は、わずか22語、しかも拗音拍は、3拍のうち、たった1回しか現れることはない。【表B】を見ても、拗音拍は音韻変化によって生まれたものが多く、本来、日本語らしくないことがわかる。

(2) 総表より、語中・語尾に比べて、語頭の濁音が著しく少ないことがわかる。ダ行が他に比べて多いのは、「出」がつく複合語がその66%、代名詞(ドチラなど)が12%を占めるからである。バ行も「場」がつく複合語が、その40%を占める。

(3) 和語については、棒引き仮名遣いは用いない。しかし、2拍分の長さを持つ「長音」の後半1拍分は、表記の上では異なる母音字の場合もあるが、単一の音韻論的単位である。従って和語にも引き音節を持つ語はある。【表C】は、第1拍と第2拍、及び、第2拍と第3拍で、母音が連続する語の数と、そのうち引き音節になる語の数を示したものである。これらの引き音節の例はすべて『明解日本語アクセント辞典』の長音の基準に従った。ちなみに、「あ」「い」「う」「え」「お」の直前に意義の切れ目のあるもの、及びそこにアクセントの高さの切れ目があるものは、少しでも丁寧に発音されると引き音節にはならない<sup>⑧</sup>とされる。

【表C】を見ると、[o-u]の引き音節が多いことがわかる。それは和語の歴史的な音韻変化である[au]や[ou]から変化したオ段の長音が多いためである。中世のキリシタン

資料では、原則として [au] から変化した開音の [o:] (「Ō」) と、 [ou] から変化した合音の [o:] (「Ō」) は区別されていたが現代では区別されない。“ばあや、じじい、おふう” など前の音節の母音をのばした俗語的な語も多い。母音の連続では [a-i] [a-e] [o-i] の数が多い。江戸語では、 [ai] [ae] [oi] [oe] [ie] などが [e:] となることがある。(現代でも方言ではこのような現象は見られる。) 母音連続が多くなると、このように母音が融合して、結果として母音連続が避けられるようになると考えられる。しかし、引き音節を持つ語は全体語数のうち、わずか1.5%にすぎない。引き音節を含むと印象としては、日本語らしさを弱める<sup>⑩</sup>。

### 3-2 典型的な和語3拍名詞

<1>で、最も典型的な和語2拍名詞は、 /kari/ であることを述べた。では、和語3拍名詞ではどうか。{|総表|} から、語頭・語中・語尾の各位置を総合すると<sup>⑩</sup>、

<語頭>	<語中>	<語尾>
/k/ /a/	母音	/r/ /i/
15.84→22.61	/k/ /a/ /k/	15.16←37.68
5.04	9.72←13.87→6.17	8.17
	3.09 2.22	
	子音	
	/a/ /k/ /a/	
	14.80←8.01→21.27	
	2.58 3.21	
	母音	
	/k/ /a/ /r/	
	7.36←19.43→8.16	
	2.82 2.58	
	子音	
	/a/ /r/ /i/	
	17.16←8.11→20.17	
	2.57 4.37	

(数字は%を表す)

の結合率が最も高い。これらを組み合わせると /kakari/ という語形ができる。「係り、掛かり、懸かり、架かり」などである。また、第1拍の子音を /s/ や /h/ に置き換えると /sakari/ や /hakari/ 「盛り、秤、計り、測り、量り、図り、謀り、諮り」、第2拍の子音を /g/ や /t/ に置き換えると /kagari/ や /katari/ 「篝、語り、騙り」という語形ができる。組み合わせを頻度の高い順に少し置き換えるだけでかなりの和語3拍名詞ができる。

### 3-3 単独母音拍について

〔総表〕によると、母音が単独で拍を構成するときは、子音を伴って拍を構成する場合と異なる特徴を示す。

第2拍において、子音の後に出てきて拍を構成する母音の場合は /a/ が全体の18.17%を占め、他を大きく引き離している。(〔総表〕①列「子後⑨」参照)しかし、第2拍が単独母音拍の場合は、/a//i//o/の頻度があまり変わらない。また/e/の頻度も子音の後に来る場合と比較すると、かなり高い。(〔総表〕①列「母後⑩」参照)

中世のローマ字で記されたキリシタン資料は音韻資料として、非常に有効である。そこに注目すべき点がある。「エは、単独で音節(拍)を構成する場合、キリシタン資料では常に“ye”と表記されており、[je]と発音されたものと考えられている。オは、単独で音節(拍)を構成する場合、キリシタン資料では常に“vo(uo)”と表記され、その音価は[w<sup>①</sup>o]であったものと推定されている。」エとオについては、なお、通時的な考察を加えるべきことがあると考える。

【表B】 拗音拍を含む語(分類は辞書による)

項目	語数	語の例
音韻変化によって生じた語	9	オテショ・キシヤゴ・キュウリ・キョウビ・クシャミ・シュウト・チョウズ・ミョウト・ヤシャゴ
俗語	5	ギッチョ・*ギッチョ・ジャンコ・チョンボ・ミッチャ *(キリギリスの別称)
複合語	3	オシャマ・オネショ・オモチャ
その他	5	エンジュ・シャギリ・シャクリ・ジョウゴ・ヤンチャ
計	22	

【表C】 母音の連続と引き音節

	第1拍と第2拍の母音連続			第2拍と第3拍の母音連続			語数合計	引音節 合計
	語数	引音節	例	語数	引音節	例		
a-a	7	1	バーヤ	2			9	1
a-i	20			62			82	
a-u	9						9	
a-e	13			35			48	
a-o	19			12			31	
i-a	9						9	
i-i	13	3	イーコ・シーナ・ ジーヤ	9	2	ジジー・メシー	22	5
i-u	12						12	
i-e	4			15			19	
i-o	22			7			29	
u-a	3						3	
u-i	13			12			25	
u-u	5	4	ユーキ・ユーゲ・ ユービ・ユーベ	1	1	オプー	6	5
u-e	2			12			14	
u-o	2			7			9	
e-a	12						12	
e-i	11			3			14	
e-u	9						9	
e-e	1	1	ネーヤ	2	2	テメー・ウレー	3	3
e-o	10						10	
o-a	4						4	
o-i	22			21			43	
o-u	26	15	オーギ・オーセ・ オーナ・ヨーカ・ コージ・トーゲ・ モケ等	7	7	キノー・スモー・ソ ノー・タトー・ア コー・イオー・ユ オー	33	22
o-e	5			11			16	
o-o	21	12	コーリ・トーカ・ トーク・トーデ・ トービ・トーミ・ トーヤ等	1			22	12
合計	274	36		219	12		493	48
引音節 ／ 語数		13.1 %			5.5 %			9.7 %

$$\frac{\text{引き音節を持つ語数 } 48}{\text{全体語数 } 3233} = 1.5\%$$

現代日本語における和語3拍名詞について



〔総表〕 出現位置別に見た音素頻度数（和語3拍名詞の場合）

	語頭		語中										語尾		計		
	母前①	子前①	①列		②列		③列		④列		⑤列		母後③	子後③			
			母後②	子後②	母前②	子前②	母後①	子前①	母前①	子前①	母前①	子前①					
度数	22	121	731	72	659	141	984	76	1090	141	984	141	984	2	589	6778	
%	0.68	3.74	13.87	1.37	12.50	2.35	16.40	1.26	18.05	2.34	16.29	0.06	18.27	0.06	18.27	16.50	
計	4.42	計	13.87	計	19.43	計	18.75	計	19.31	計	18.63	計	18.33	計	18.33	16.50	
i	10	123	572	72	500	69	518	95	508	69	518	95	508	114	1104	4875	
	0.31	3.80	10.85	1.37	9.49	1.58	8.47	1.57	8.41	1.14	8.58	1.57	8.41	3.53	34.15	11.87	
計	4.11	計	10.85	計	10.86	計	9.78	計	9.98	計	9.72	計	9.98	計	37.68	11.87	
u	1	107	348	26	322	40	553	40	553	48	570	40	553	8	133	3367	
	0.03	3.31	6.60	0.49	6.11	0.67	9.22	0.60	9.22	0.80	9.50	0.66	9.16	0.25	4.13	8.20	
計	3.34	計	6.60	計	6.60	計	9.88	計	9.88	計	10.30	計	9.82	計	4.38	8.20	
e	0	13	335	50	285	14	171	56	160	14	171	56	160	14	171	704	
	0.00	0.40	6.36	0.95	5.41	0.93	2.67	0.93	2.65	0.23	2.83	0.93	2.65	0.23	2.83	232	
計	0.40	計	6.36	計	6.36	計	3.60	計	3.60	計	3.08	計	3.58	計	3.06	3.06	
o	34	168	425	70	355	94	452	94	452	57	471	94	452	57	471	350	
	1.05	5.20	8.06	1.33	6.74	1.57	7.53	1.56	7.48	0.94	7.80	1.56	7.48	0.84	10.83	8.71	
計	6.25	計	8.06	計	8.07	計	9.10	計	9.04	計	8.80	計	9.04	計	11.67	8.71	
ja	7	77	3	0	3	12	4	3	58	12	4	3	58	73	3	320	
	0.22	2.38	0.06	0.00	0.06	0.20	0.07	0.05	0.97	0.20	0.07	0.20	0.07	2.26	0.09	0.78	
計	2.60	計	0.06	計	0.06	計	0.27	計	1.02	計	1.01	計	0.27	計	2.35	0.78	
ju	11	44	2	2	0	3	0	0	20	0	20	3	0	0	22	1	
	0.34	1.36	0.04	0.04	0.00	0.05	0.00	0.00	0.33	0.05	0.00	0.05	0.00	0.33	0.68	0.31	
計	1.70	計	0.04	計	0.04	計	0.05	計	0.33	計	0.05	計	0.05	計	0.33	0.31	
jo	3	71	5	4	1	8	0	4	23	8	0	4	23	17	4	175	
	0.09	2.20	0.09	0.08	0.02	0.13	0.00	0.07	0.38	0.13	0.00	0.07	0.38	0.53	0.12	0.43	
計	2.29	計	0.09	計	0.10	計	0.13	計	0.45	計	0.13	計	0.13	計	0.45	0.43	
k	母前②	子前②	母後④	子後④	母前④	子前④	母前④	子前④	母前④	子前④	母前④	子前④	母前④	子前④	母後④	子後④	計
	512	422	422	422	422	422	422	422	422	422	422	422	422	422	422	422	3126
	15.84	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	8.01	7.61
g	9	264	264	264	264	264	264	264	264	264	264	264	264	264	264	264	1457
	0.28	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	5.01	3.55
計	5.01	計	5.01	計	5.01	計	5.01	計	5.01	計	5.01	計	5.01	計	5.01	5.01	3.55



## おわりに

和語3拍名詞の音素分布を調べ、その結果から日本語らしい語形について考察してきた、従来の研究結果の日本語らしいと感じられる項目を統計的に数値で裏付けることが出来たと思う。その結論として出てきた最も日本語らしい語形は、和語2拍名詞の場合が／kari／だったのに対して、和語3拍名詞の場合は、／kakari／だった。単独母音拍の場合は、この結果と異なることも明らかになった。

しかし、今回は音素分布の特徴を表面的に観察したに留まり、深く分析するまでには至っていない。また、タ行などを一括して、扱ったことについて、音韻論的立場からの説明を行わねばならないが本論ではふれられなかった。

音素分布の一層深い考察を行うことと、他の品詞についても同様の調査を行うことなどが今後の課題である。

### 注

- ① 林 大『ことばの体系』1957年 筑摩書房
- ② 玉村文郎『語彙の研究と教育(上)』1984年 国立国語研究所 P20 掲載  
中村仁美「音韻論から見た現代日本語における2音節和語名詞について」同志社大学1983年度卒業論文
- ③ 神保格『日本の言語学』第2巻 音韻 1980年 大修館書店 P10
- ④ 市河三喜『英語学辞典』1940年 研究社 P400
- ⑤ ／w／は半母音であるが、それに続く母音が／a／のみであることと、現代標準日本語では、拗音を構成しないことから本論では、子音の項に入れることとする。
- ⑥ 玉村文郎『語彙の研究と教育(上)』1984年 国立国語研究所 P26
- ⑦ 玉村文郎『語彙の研究と教育(上)』1984年 国立国語研究所 P22
- ⑧ 『明解日本語アクセント辞典』第2版 1981年 三省堂 解説の項
- ⑨ 単独母音で第3拍を終える場合、面白い傾向がでている。第3拍で／a／／u／が単独母音拍としてはっきり発音される語がない。／a／で終わる語は“かかあ・ばばあ”，つまり引き音節，／u／で終わる語は“あこう・いおう・きのう・すもう…”など8例ともすべて引き音節である。「マリア」「アリア」という語が日本語らしくない理由として、このような音韻面からの理由も考えられるだろう。
- ⑩ 語頭、語中、語尾についての各表を今回は掲載できなかった。本論の数値は{|総表|}以外に、それらの表から出したものである。
- ⑪ 春日和男編『国語史概説』1978年 有精堂 P198

### <参考文献>

- 玉村文郎『語彙の研究と教育(上)下』(1984, 1985年 国立国語研究所)  
玉村文郎編『日本語学を学ぶ人のために』(1992年 世界思想社)  
柴田 武編『日本の言語学』第2巻 音韻 (1980年 大修館書店)

- 金田一春彦『日本語音韻の研究』（1967年 東京堂出版）  
春日和男編『新編国語史概説』（1978年 有精堂出版）  
林 大監修『図説日本語』（1982年 角川書店）  
金田一春彦監修 秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典』第2版（1981年 三省堂）  
国語学会編『国語学大辞典』（1980年）  
市河三喜編『英語学辞典』（1940年 研究社）